

近代デザイン全般の中でのエディトリアルデザインの成立に関する研究

杉浦康平デザイン研究の継承と展開

STUDY ON THE ESTABLISHMENT OF EDITORIAL DESIGN IN MODERN DESIGN

Succession and Development of Our Study on Kohei Sugiura's Design

赤崎 正一 芸術工学部ビジュアルデザイン学科 教授
戸田 ツトム 芸術工学部ビジュアルデザイン学科 教授
寺門 孝之 芸術工学部ビジュアルデザイン学科 教授
小山 明 基礎教育研究センター 教授
黄 國賓 芸術工学部ビジュアルデザイン学科 准教授
寺山 祐策 武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科 教授

Shoichi AKAZAKI Department of Visual Design, School of Arts and Design, Professor
Tsutomu TODA Department of Visual Design, School of Arts and Design, Professor
Takayuki TERAKADO Department of Visual Design, School of Arts and Design, Professor
Akira KOYAMA Center for Liberal Arts, Professor
Kuo-pin HUANG Department of Visual Design, School of Arts and Design, Associate Professor
Yusaku TERAYAMA Department of Visual Communication Design, Musashino Art University, Professor

要旨

本研究は平成24年度共同研究からの継続として位置づけられる。杉浦康平名誉教授の1950年代からはじまるデザイン活動の包括的な研究を目指すものである。1970年代～80年代の杉浦名誉教授の活動を中心に成立したと思われる「エディトリアルデザイン」概念の成立過程の検証も目的とする。また、本研究のひとつの中核をなすものとして杉浦名誉教授デザインによるポスター作品の収集・整理・分析の活動である「ポスターアーカイブ・プロジェクト」がある。26年度共同研究の過程で浮かびあがってきたのが「インフォグラフィックス・デザイン(情報デザイン)」の概念である。ビジュアルデザイン学科棟資料室に蔵された多量のポスターのリスト内容の更新の過程で、分析の軸をなす概念としてこの新しい視座を得た。杉浦デザインの多様性に対して、ひとつの強力な分析の切り口を得たものとする。70年代に多くの成果を生んだダイアグラム・デザインとの関連も重要であり、集大的出版によって、さらに多くのことが明示化されてきた。また、本共同研究では例年同様、いくつかの関連企画を開催した。10月のレクチャー・研究会、11月のインフォグラフィックスの歴史を通観する「系統樹の森展」、3月の卒展選抜展としての「PLATEAU展」などである。特に2つの展示企画については新設された梅田サテライトの活用としても意味を持つものである。

Summary

The objective of this course, originated from the 2012 joint research program, is a comprehensive study of Professor Emeritus Kohei Sugiura's design activity which started in the fifties. The course also aims at examining how the concept of "editorial design" was developed around the activities of Professor Emeritus Sugiura in the seventies and eighties. One of the key activities of the course is the Poster Archive Project which entails the collection, classification and analysis of posters designed by Sugiura. During the 2014 joint research program, we came up to the concept of "infographic design" in the process of updating the list of the posters archived in Department of Visual Design. The concept offers a new, insightful perspective to analyze the diversity of Sugiura design. The course also focuses on diagram design, one of the key achievement of Sugiura which flourished in the seventies, and clarifies many important ideas. In this program, as in the past programs, we hold several events including a lecture/workshop in October, Phylogentic Forests in November (an exhibition focusing on the history of infographics), and 2015 PLATEAU OSAKA in March (an exhibition of selected works of faculty members of the department.) The latter two attract attention also as meaningful ways to use newly-built CURIO-CITY in Umeda, Osaka.

研究活動の背景と動機、目標

「エディトリアルデザイン」から「インフォグラフィックス」へ……これが 26 年度の本共同研究の重要な指針である。

24 年度・25 年度から継続している杉浦デザイン研究によってリスト化したポスターアーカイブ・プロジェクトの成果などを前提に、より広い近代デザイン全般を俯瞰する視野から、現代日本における概念「エディトリアルデザイン」の領域についての研究をすすめることが一貫継続する研究の軸であるが、これまでそのデザイン成果物の多様性によって見えていなかった「インフォグラフィックス」の概念が前掲に浮上してきたのが本年度である。その大きなきっかけは前年度（平成 25 年度）から準備のすすんでいた杉浦ダイアグラムデザインの集大成としての書籍の刊行が 26 年度 9 月に実現したことにある。

単行本「時間のヒダ、空間のシワ…[時間地図]の試み」(鹿島出版会刊) (図 1) である。70 年代から続く杉浦名誉教授とそのスタッフたちによるダイアグラムの開発は、日本のグラフィックデザイン界においては、きわめて特殊な位置を占める活動であったが、その意義の本質について語られることは決して多くはなかった。21 世紀の今になってそれらが一冊の単行本としてまとめられたことによって見えてきたのは、デザイン成果の回顧にとどまるものでなく、未来を目指す強力な示唆としてである。本書に紹介されている中心的なプロジェクトである「時間（距離）地図」は、ビッグデータ活用の有用性がさまざまに模索されている現代においてこそ、その真の意味が見直されることになった。本書中においてはチーム「hclab.」によってコンピュータが描く「時間（距離）地図」のリアルタイム変移が紹介されている。ここで生成し、形を変え続けて流動するような地図像は、実はその背後に、本研究の 25 年度の成果として言及した「自己生成デザイン」そのもののコンセプトがある。デザインにおける自律性という初期杉浦デザインが目論んでいた、近代的主体の操作からの解放の試みへと半世紀の時間を隔てて環流するものだと言える。

情報としての文字と、情報としての画像を「構成」によって配置することが「グラフィックデザイン」の謂であるとすれば、「インフォグラフィックス」の機能は遍在する多様で大量



図 1、「時間のヒダ、空間のシワ…[時間地図]の試み」のカバーデザイン（鹿島出版会刊、26 年 9 月刊）
図像は「名古屋駅を中心として時間（距離）地図」1985 年



図 2、レクチャー・研究会「オットー・ノイラートから杉浦康平へ」の学内掲示用ポスター

の情報を視覚的な認識へとつなげる構造的な変換にあるといえる。このような思考を知り、デザイン作業の中へ導入することこそは、これからのビジュアルデザインに求められる重要な役割であると考えられる。

1) レクチャー・研究会「オットー・ノイラートから杉浦康平へ」の開催（平成 26 年 10 月 31 日）(図 2)

ヨーロッパにおけるインフォグラフィックス表現の始祖ともいえるオットー・ノイラート研究の我が国における第一人者である寺山祐策武蔵野美術大学教授を招いて、杉浦名誉教授との連続レクチャー、およびトークセッション・質疑応答によって、「インフォグラフィックス」の歴史的展開を俯瞰し、杉浦デザイン、さらにそれ以降への展望を得ることを目的に開催した。

（本企画を契機としてポスターアーカイブの中からインフォグラフィックスを手法・テーマとしたポスターを選抜して展示する計画がはじまった。→平成 28 年 2 月に梅田サテライトでの開催予定。）

2) 「系統樹の森展 osaka」(図 3～6) の開催。

本展は平成 25 年度に東京で開催されたインフォグラフィックスをテーマとした展覧会「系統樹の森展」を展示空間規模においても展示点数においても 1.5 倍

から2倍ほどに拡大した、決定版の意味を持つ。また26年度から運用のはじまった梅田サテライト（キュリオシティ、グランフロント大阪）における初の展覧会企画としても位置づけられる。

樹木のイメージは人類社会のはじまりの時から、人間の思考の原型として、さまざまに表現されてきた。あらゆる地域の文化の中で情報の可視化のために「樹」のイメージは多様な図像を生んできた。またあらゆる時代にもわたり、太古の王たちの系図から現代のビッグデータのビジュアライゼーションまで、その実例はきわめて広範に展開している。そうした人間文化の全史中に蓄積されてきた「系統樹」図像の内から、美的にも構造的にもきわだつものを80点ほどにしぼり、大判プリンター出力による長尺版バナーの林立する空間構成で、人類史の「森」として再現した。本展企画の初期段階では梅田サテライト内で、今後とも継続使用できることを前提とした汎用展示パネルを独自の3枚構成の可動式のものとして開発した。（この展示システムは後述する「PLATEAU 大阪展」においても有効活用した。）本展の意味は従来ビジュアルデザインの全般の動向の中で比較的焦点のあたることの少なかったインフォグラフィックスの概念を前面化して、ビジュアルコミュニケーションの機能の中核的なものとして、認識を改めさせたことにある。

本展を背景として見立て、杉浦デザインをひるがえって見ると、戦後デザインの中におけるその特異性・突出性の持つ意味がきわめて明確になるものとする。ひとつは「インフォグラフィックス」概念であり、いまひとつは従来から本研究の継続的テーマである「エディトリアルデザイン」であり、その意味の新たな読みなおしである。

本展期間中には、企画者である杉山久仁彦氏（グラフィックデザイナー）とゲストの三中信宏氏（進化統計学、農業環境技術研究所 首席研究員）によるレクチャーを開催し、多くの医学系・理学系の研究者の聴講参加を得て、現代の先端的な研究における膨大な数量データの処理に「インフォグラフィックス」の観点から



図3、「系統樹の森展 osaka」のコンセプト・ムービー、オープニング・タイトル（製作=谷口正博）



図4、「系統樹の森展 osaka」の会場展示風景

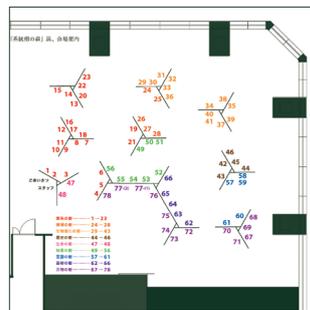


図5、「系統樹の森展 osaka」の会場配置図
（キュリオシティ=梅田サテライト、グランフロント大阪）



図6、「系統樹の森展 osaka」の会場配付用リーフレット（部分）
（デザイン=杉山久仁彦）

不可欠となっていることが、うかがえたことも収穫と言える。

3) エディトリアルデザインにおける研究と教育の成果の発表の場として、ビジュアルデザイン学科有志教員による「PLATEAU 展 osaka」展（図7～11）の開催。

本展は平成 25 年度に東京・青山のスパイラルで開催した第 1 回の「PLATEAU 展」の年次ごとの継続の第 2 回目として企画された。ビジュアルデザイン学科におけるすべての作品形式を対象とするものであるが、ビジュアルデザイン学科の特徴として、あつかわれる作品形態の幅広さがある。通常の平面作品と動画、フルデジタル工程のもの手作業のみで一貫して仕上げるもの、巨大な平面作品と掌におさまるほどの冊子形式のもの、一様でないのみならず、特に近年では相反する手法を複合させるような実験性に富んだものも多く現れるようになった。仮説としては、こうした新しい事例も、またそれらをひとつの空間へと統合して展示する、構成の思考も、多くエディトリアルデザインの感性のバックグラウンドにおいて機能していると考えられる。展示空間は個々の作品の成果の発表の場であるとともに、その期間にだけ成立する固有の体験をもたらす、特別な空間として、われわれの記憶に跡づけられるものである。

本展も梅田サテライト（キュリオシティ、グランフロント大阪）を会場とした。そのことで、第 1 回目とはかなり印象の異なる空間が出現した。ビジュアルデザインにおける展示というテーマについては今後もさまざまな試みに挑戦したい。

*

本共同研究はテーマを修正・微調整しながら平成 27 年度分の研究助成もいただいて継続中である。現在も上記の各研究記録の整理・解析中であり、ひきつづき学内・学外を問わず多くの方の協力を得て、活動を継続・展開していく予定である。



図 7、「PLATEAU 展 osaka」のコンセプト・ムービー、オープニング・タイトル（製作＝榮元正博）



図 8、「PLATEAU 展 osaka」のポスター（デザイン＝ニコール・シュミット）



図 9、「PLATEAU 展 osaka」会場入口のバナーとモニター

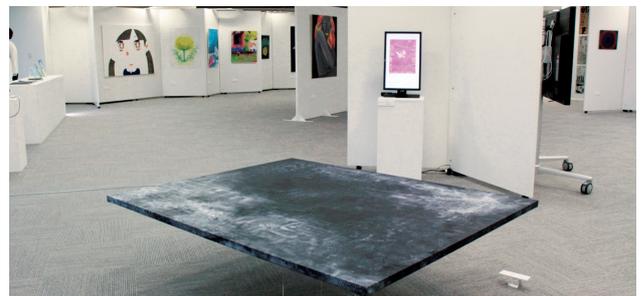


図 10、「PLATEAU 展 osaka」の会場展示風景



図 11、「系統樹の森展 osaka」における学科関連展示コーナーの活版印刷の版と会場窓外の景観